

IMAGE ARTS AND SCIENCES

日本映像学会報 No. 191, 2021

VIEW 展望

学会活動を振り返って／田島良一…2

INFORMATION 学会組織活動報告

総務委員会…3 研究企画委員会…3 映像表現研究会…4

映像テキスト分析研究会…5 映画文献資料研究会…5

アニメーション研究会・映像心理学研究会…6-7 アナログメディア研究会…7-9

ショートフィルム研究会…10 アジア映画研究会…10-11 写真研究会…12-13

映画ビジネス研究会…14 ドキュメンタリードラマ研究会…15

関西支部…16 中部支部…16-18 西部支部…19

FROM THE EDITORS

編集後記…19

「Image Arts and Sciences / 日本映像学会報第 191 号」2021 年 5 月 15 日発行

発行人：斉藤綾子 編集担当／総務委員会（西村安弘・佐藤由紀・加藤哲弘）

日本映像学会事務局：176-8525 練馬区旭丘 2-42-1 日本大学芸術学部映画学科内

e-mail：office@jasias.jp <https://jasias.jp/>



日本映像学会

学会活動を振り返って

田島 良一

日本映像学会は今年の9月で創立47周年を迎える。当然ながらこの間には多くの出来事があったが、中でも最も大きな変化は学会員の世代交代であろう。私が映像学会に入会したのは学会創立の翌年の1975年、大学院の2年生の時だったと記憶している。入会後の76年の6月から総務委員となり、86年の6月から大竹徹第2代会長による指名理事に任命され、以後、2012年6月まで理事、常任理事を務めさせて頂いた。私が理事の被選挙権を持たなくなってから早くも9年が経ち、私が入会当時に活躍された南博初代会長をはじめ、岡田晋、真鍋信誠、依田義賢、山田幸平理事など、多くの創立メンバーの方々が亡くなられ、当時を知る学会員も少なくなった。某大学の惹句に「過去は未来を教えてください」というのがあったが、学会員の世代交代が進む現在、学会創立の頃を知らない会員のために学会の歴史を振り返ってみることも、今後の学会の発展のために無駄ではあるまい。とはいえ、創立メンバーでもない私が学会創立当時の経緯を実体験として語れる訳もなく、また、創立に関わった方々の当時の回想も既に『会報』などに書かれており、私にできることは、私自身が関わった学会活動を振り返り、多少なりとも記録として残すことでしかない。

そんな私が最初に担当した学会の仕事は、総務委員として74年10月に創刊された『日本映像学会報』の編集実務だった。確か、76年7月10日発行の第15号から78年11月8日発行の31号位までの約2年間、事務局担当の真鍋理事の監修の下で、私が一人で編集実務を担当していたと記憶している。私が担当した『会報』は現在のようなA4の大判ではなく、B5サイズの原則4頁立てで、会員相互の情報交換を目的に月1回の発行が目標だった。印刷は江古田の日大芸術学部の近くにあった一光印刷が請け負っていたが、学会機関誌『季刊映像』の刊行が軌道に乗ったことから2カ月に1回の発行になり、さらに年8回の発行になった。だが、予定通りには発行できず、特に、事務局長だった真鍋理事の6カ月間の長期海外出張や会費未納による財政悪化、そして、事務局員の退職などで事務局運営に空白が生じ、17号から18号まで、約半年間休刊した苦い思い出がある。

次に私が関わったのは、去年亡くなった加藤幹郎氏が編集委員長だった時の『映像学』(65-68号)の編集委員としてであった。私は査読だけでなく、実質一人で編集実務も兼ねていたが、掲載論文の校正で、校正の度に文章の訂正や加筆をしてくる会員がいて、私はそのやり取りでゴールデンウィークの休暇を潰し、編集作業は無償の行為であるだけにさすがに腹がたち、これでは校正の意味がないと強く抗議したことを覚えている。その他、私が関係した『映像学』ではないが、投稿論文の掲載可否をめぐる査読委員への誹謗などのトラブルがあったこともイヤな思い出として忘れられない。ちなみに『映像学』の機関誌名は最初『季刊映像』であったが、1981年6月刊行の第21号から『映像学』と改称された。『映像学』が『季刊映像』の誌名であった時代には投稿論文が少なく、そのため、特集テーマにそって集められた依頼原稿で構成されていたが、現在では投稿論文だけで刊行できるようになり、例えば、近刊の『映像学』第105号では、21本の論文の投稿があり、採択されたのは、その内の4本という盛況である。それだけに、これからは査読の厳正さ、透明さがさらに強く求められていくに違いない。

この『映像学』の編集委員の次に私が関係したのは東部支部の担当理事としてであった。東部支部は従来の本部が支部に移行したもので、1990年の第17回通常総会で設置が承認された。設置当初は「映

画史研究会」(代表・岩本憲児)、「コンピュータ・グラフィックス研究会」(代表・河口洋一郎)「映画資料文献研究会(その後、映画文献資料研究会に改称)」(代表・牧野守)などの既存の研究会が活動母体となり、その後、東部支部所属の研究会として「アニメーション研究会」(代表・横田正夫)「映像心理学研究会」(代表・横田正夫)「映像テキスト分析研究会」(代表・長谷正人)などが加わった。

私が東部支部担当理事となつてから、東部支部独自の企画として実施したのは東部支部講演会であった。これは東部支部所属の5つの研究会が合同で行ったもので、第1回の講演会を2010年3月20日に日大文理学部百周年記念館で実施した。講師はアニメ映画の監督・演出家の高畑勲氏で、同氏は「アニメーションと日本文化」と題してアニメーションと絵巻物の関係について講演し、当日は105名が参加するという盛況であった。

第2回目は2010年12月4日に東京工芸大学芸術情報館で、「映画固有の表現力とは何か—『石の詩』(TBS,1963年)をめぐる」と題して松本俊夫元本学会会長が自作の『石の詩』の上映を交えて講演を行った。

第3回目の講演会は2011年11月26日に日大芸術学部江古田校舎東棟301教室において開催され、同じく波多野哲朗元本学会会長が「映画批評は可能か?」と題して講演を行ったが、私が理事として学会活動に関わったのはこれが最後となった。

この他、私が関わった学会活動としては、代表として牧野守、小笠原隆夫両会員の後を受け継いだ「映画文献資料研究会」の活動があるが、これは研究会の活動であるので、これについては割愛したい。以上が私の関わった主な学会活動だが、学会の記録として参考になれば幸いである。



第5回映像学会大会(1979年)における南博会長を囲む記念撮影

(たじまりよういち)

総務委員会

佐藤 由紀

2020年度を振り返って

コロナ渦でスタートした異例づくしの2020年度でしたが、会員のみなさま、委員各位のご協力のおかげでなんとか一年間総務委員会を運営することができました。改めて御礼申し上げます。

さて2020年度、学会運営をより明解化するために、総務委員会がおこなってきた活動を以下にご報告申し上げます。

●担当制の導入

総務委員会は学会の「よろず屋」であるため、学会運営のさまざまな案件を取り扱うこととなります。従来は会長や副会長をオブザーバーとし、総務委員長・副委員長がスーパーマンのようにあらゆる案件に対応してきました。秋頃より試験的に「担当制」を導入し、各担当の委員の方々に報告、提案等をしていただくようにしました。各担当を設けることにより、より細やかに運営状況に目が行き届くようになってきたと感じています。

一年ほど運用した後、担当制の長所、短所を検証し、より良い形で総務委員会の運営方法を更新していきたいと考えています。

●規程集の掲載

日本映像学会の会則は既に本学会ホームページに掲載されていますが、会報の投稿規定や、研究会運用規程等、会員が「会報に投稿したい」「研究会を立ち上げたい」といったアクションをおこそうとする際に必要となってくる規程が、ホームページに公表されていなかったため、会員ログインページ内に「日本映像学会規程集」というリンクページを作成し、各規程等を掲載しました。

今後も、会員のみなさまが学会での活動を希望される際、どこになががあるのか、なにをみればいいのか、がわかるような情報提供の方法を検討していきたいと思います。

●Facebookの運用

本年度よりFacebook内に日本映像学会のページを立ち上げました。情報は、学会のホームページと同様ですが、Facebookにご自身のページをお持ちの会員の方は、日本映像学会ページの「いいね」ボタンを押していただけると、学会ホームページをみなくとも、更新情報を参照できるようになっています。ぜひご利用ください。

●新入会員申込書フォーマットのマイナーチェンジ

「日本映像学会正会員入会申込書」をマイナーチェンジしました。主な変更点は、推薦者の自筆が不要となり、その代わり、推薦者から事務局宛に推薦メッセージを送付していただくようになりました。

コロナ渦により対面での交流が制限されたことが今回の変更のきっかけですが、おそらくポストコロナ時代となっても、対面ではない形でのコミュニケーションや地域を越えた活動が今までよりも活発になっていくことは想像に難くないため、今後も同形式で申込書を運用していく予定です。

2021年度も会員のみなさんが活発に活動していけるような場づくりをしていければと思っています。どうぞよろしくお願い申し上げます。

(さとうゆき/総務委員長、玉川大学)

研究企画委員会

富田 美香

研究企画委員会報告

・第47回大会発表申込予備審査について2月23日付で理事会から依頼を受け、3月13日までに、研究発表34件、作品発表7件のエントリーに対して予備審査を行った。3月14日10:00-11:30、ZOOMにて研究企画委員会を開催し、審査結果の集約・判定をおこなった。

審査基準と審査方法は、2020年12月理事会で決定された以下の通り。

審査基準：約800字の概要が記載されていること。

映像に関する発表内容であること。

学会にふさわしい発表内容であること。

方法：各委員が、○(問題なし)、△(要検討)、×(不適当)のいずれかで採点し、委員会で集約・判定。

予備審査結果は、以下(1)から(6)の分類・件数となった。*は各判定基準。

(1)「採択」：研究発表14件、作品発表1件

*特にコメントもなく、委員全員「○」をしている発表。

(2)「コメント付採択」：研究発表17件(条件付採択①1件含む)、作品発表6件

*委員全員「○」だがコメントがある。あるいは1～3名が「△」をつけた。

(3)「条件付採択」(条件は2種:①期日までの入会手続き・会費納入/②理事会の所見をふまえた概要の再提出)：①研究発表2件(コメント付採択1件含む)、作品発表0件。②は0件。

*①は新入または会費未納会員。②は委員の過半数以上が「△」をつけたが、再提出すれば採択してよいと判断できるもの。

(4)「再審査」：研究発表2件、作品発表0件

*委員の過半数以上の「△」があるもの。

(5)「不採択」：0件

(6)「その他」：0件

このうち、「コメント付採択」については概要の再提出を4月12日まで受け付けることを可とし、「再審査」については3月31日までに概要の再提出を求めることとした。また、研究発表と作品発表の書式の誤利用が複数あり、予備審査にも影響があるため、その対策を課題として共有した。

上記について、3月20日理事会に内申し、同日の理事会審議にて承認された。

・「再審査」の2件について、3月30日に理事会より再審査依頼を受け、4月3日まで審査を行い、4月3日から4日にかけて研究企画委員会メール審議を行った。

以下の再審査結果について、4月4日に理事会へ内申し、6日までの理事会メール審議にて了承された。

「採択」：作品発表1件

「コメント付採択」：研究発表1件

以上

(とみたみか/研究企画委員長、国立映画アーカイブ)

映像表現研究会

伊奈 新祐

<映像表現研究会報告>

今回の研究会は、コロナ禍のため、2020年12月27日(15:00～17:00)に「オンライン(zoom使用)」での実施となりました。研究会事務局である東京・日大がホストとなって開催されました。例年であれば、11月に京都をスタートし、名古屋、そして東京へと上映会を巡回し、同時に分科会的にそれぞれの地区でトークセッションを行ってきました。第14回は今までにないオンラインでの合同研究会となりましたが、多くの参加校の推薦教員が集い、従来の対面での研究会とは異なり、ある意味で盛況な会となったと思います。

【参加校一覧】

愛知淑徳大学、イメージフォーラム映像研究所、大阪芸術大学、九州産業大学芸術学部、京都精華大学芸術学部、久留米工業大学、尚美学園大学、椋山女学園大学文化情報学部、成安造形大学、玉川大学芸術学部メディア・デザイン学科、東京工芸大学芸術学部、東京造形大学、東北芸術工科大学映像学科、名古屋学芸大学映像メディア学科、日本工業大学情報メディア工学科、日本大学芸術学部、文教大学情報学部メディア表現学科、北海道教育大学

まずは各推薦教員から自校の代表作品の上映後、その作品解説と他校で注目した作品について講評を行い、その後、今回のコロナ禍の状況での問題や作品の特徴などを取り上げて意見交換を行いました。

昨年亡くなられた本研究会の初代代表である波多野哲朗先生が書かれた「映像表現研究会発足に向けて」という書面を先日、研究室の整理をしていた時に偶然発見しましたので、読み返してみました。研究会の設立趣旨を記した文面のあとに、「当面の活動計画」として以下の四項目があります。

- (1) 年1～2回の上映会及びそれに伴うシンポジウムを開催する。
 - ：会員の新作を中心に上映及び展示。
 - ：開催時期は適宜とし、会場は各支部にて持ち回り。
 - ：可能な範囲で、将来の学会員になりうる若い作者のプログラムを企画。
- (2) 大会における作品発表を通して、研究会独自のシンポジウムを開催する。
- (3) 支部において、会員を中心とした分科会的な勉強会を行っていく。
- (4) 各国政府機関の文化部(ドイツ文化センター等)との協力関係を築いていく。

現状から振り返ってみますと、(1)は概ね実践できている。(2)の大会における会員による作品発表において「新作の上映・展示」が行われているが、近年の大会では、開催校の設備や会場事情などにより、必ずしも研究会独自のシンポジウムを開催できてはいない。(3)の各支部での勉強会的なものは、東京以外の支部では、支部研究会の中で行われているともいえますが、本研究会独自の勉強会は最近、実施されてはいません。他の創作系の研究会と合同で講演会やシンポジウムを今後、企画計画することも必要であろう。また地域にこだわらず「オンライン」でのシンポジウムや勉強会の形式も今後、企画していくことも考えられよう。(4)の外国の文化センターなどとの交流は、近年では少なくなっているが、他のフェスティバルとの共催的な繋がりによって海外との作品交流の機会はある程度存在するし、インターネットによって海外作品を視聴することが日常化した現在では、外国機関とのコネクションは、人的交流の機会・情報を除けば、特に問題ない状況

かと思われます。

引き続き研究会メンバーを中心に活動の在り方を検討していく必要があると思われまます。参加メンバー及び会員諸氏からの提案など御意見を研究会事務局までお寄せ頂ければ幸いです。

(いなしんすけ/映像表現研究会代表、京都精華大学)

<ISMIE参加作品>の詳細については、以下を参考して下さい。

<https://e-h-kenkyu.hatenadiary.org/>

継続公開可能な作品はYouTubeチャンネル(ISMIE2020)にて公開中です。

<https://www.youtube.com/user/ismie2012>

映像テキスト分析研究会

藤井 仁子

2020年度(通算第20回) 研究発表会を去る2021年3月27日(土)、Zoomによりオンラインにて開催した。発表者は早稲田大学総合人文科学研究センター助手の鳩飼末緒会員、題目は「日活ロマンポルノの黎明期——摘発事件を経た「型」の確立」であった。事前登録制をとり、当日は20名の参加を得た。

前回から2年も空いてしまったのはちょうど1年前、2019年度の研究発表会を準備中に周知の理由によって中止を余儀なくされたためである。オンライン開催は本研究会にとって初の試みだったが、普段は東京まで足を延ばすことが難しい会員にもご参加いただけたようで、発表後には従来と変わらず活発な議論が繰り広げられた。

以下は鳩飼会員ご自身による報告である。

＊

本発表では日活ロマンポルノ黎明期の3作品のテキストの比較検討を通じて「日活ロマンポルノを存続させた「型」とはいかなるものだったのか?」という問いに答えを与えることを試みた。今年ロマンポルノはその創始からちょうど半世紀を迎えるものの体系的な研究は未だなされておらず、既存の言説は同時代に書かれた作家主義的な批評が大半を占めている。ロマンポルノという事象の実態解明のためには、作家主義的観点から評価されてきたいわゆる傑作・名作以外の「普通の」ロマンポルノにこそ注目する必要性があり、それらの作品群を特徴付ける「型」の有り様を説き明かすことを発表の目的とした。考察にあたってはロマンポルノの作品を構成する要素を便宜上「ナンバー」、すなわち性的描写の部分と、「ナラティヴ」、つまり物語の部分とに分けて、それぞれの要素について検討していった。

女性主人公を中心にセックスを主たる関心として展開する現代劇という後に引き継がれるモデルを提示したのは第一回作品の『団地妻 昼下りの情事』(西村昭五郎、1971年)であるが、ロマンポルノはこの第1作を下敷きにしつつ、徐々に変質していくこととなった。「ナンバー」面での変容の直接的な契機となったのは1972年1月に起きたロマンポルノの摘発事件である。発表ではまず『昼下りの情事』が同時代的には既存の成人映画を凌駕する強度の性的描写を含む作品であったことを確認した。そのうえで摘発事件後に公開された『闇に浮かぶ白い肌』(西村昭五郎、1972年)を参照することで、摘発の余波が続いたために以後のロマンポルノは性的な場面における「最大限の可視性」の達成を志向しなくなったと主張した。また「ナラティヴ」の面では、典型的なロマンポルノは、セックスを主題とすることで描かざるを得ない男性にとっての「不都合な真実」を女性の側の受難や葛藤にすり替えて提示することでカモフラージュし、男性観客にユートピア的な感覚を享受させる特徴を持っていたと論じた。そしてその作風の萌芽は『昼下りの情事』に見られるが、この作品ではヒロインが夫の不甲斐なさを責める様子が描かれるなどカモフラージュが徹底されていない。発表では、後の作品群に典型的に現れるロマンポルノのヒロインはむしろコンプレックスや弱さを持つ非英雄的な男性たちを受け入れる女性であったことを指摘し、同じ「団地妻もの」の3作目として公開された『団地妻 忘れ得ぬ夜』(遠藤三郎、1972年)の主人公の描き方をその好例として提示した。

発表後、参加者の皆様からは多くのご意見を頂戴し、非常に有意義な質疑の時間となった。とりわけ、摘発とその関連事案に関してより広範な資料調査を行うこと、そして摘発事件以後の日活の対応についてテキスト・コンテキストの両面から再度考察することの必要性を痛感したので、今後の課題としたい。

(ふじいじんし/映像テキスト分析研究会代表、早稲田大学文学学術院)

映画文献資料研究会

上田 学

「受容から考える映画史——近藤和都著『映画館と観客のメディア論』書評会」と題した第48回映画文献資料研究会を、2021年3月28日(日)14時から16時にかけて、Zoomを用いてオンライン開催した。23名の参加者を迎え、司会の上田学(神戸学院大学)が務めた。

西村安弘研究会代表(東京工芸大学)の開会挨拶に続き、近藤和都会員(大東文化大学)から著書に関する要旨が説明された。同書は映画館プログラムを主な資料とし、20世紀前半の日本の映画館における観客性を問うた研究であり、第1章で所有不可能な映画の代替的なメディアとして、先行する演劇文化の模倣から映画館プログラムが誕生したこと、第2章で映画館プログラムを「読むこと」のみならず「書くこと」が、映画を「観ること」をも規定して過程が指摘された。第3章で映画館プログラムの言説を通じた映画館ごとの人格的なコミュニティの形成が論じられ、第4章で関東大震災後の都市変容とトーキー化を背景とした、映画館の複合施設化が考察された。第5章で1930年代における文字からイメージへの誌面の変化が、作品への観客性の条件づけを示すものとされ、第6章でそのような条件づけが、戦時下における映画館プログラムを通じた統制へと転用される過程が明らかにされた。

このような近藤の説明を受けて、二人の評者から意見が出された。まず仁井田千絵会員(京都大学)は、第一に近藤の研究が「地政学」を分析軸の一つとしているにも関わらず、地理的な考察が十分ではないこと、第二に映画館の複合施設化に関して、同時代の演劇との関係の考察が欠如しており、松竹や東宝は両者にまたがる興行を抱えている以上、その影響は必然であること、第三に「オフ・スクリーン」という用語と、スクリーンの表象との関係が不明瞭であることが指摘された。

また板倉史明会員(神戸大学)は、社会学と映像学という二つの学問分野にまたがる近藤の研究の困難さに理解を示しつつ、第一に1930年代の映画館の複合施設化に関して、「観ること」という経験が複合化していく同時代の文化的状況へのより広汎な考察が必要であること、第二に認知主義的映画理論からいえば、映画の「終点」から映画館プログラムを通じて事後的に物語が想起されるという近藤の視座は、映画の鑑賞中に様々な手がかりから物語を行きつ戻りつ理解するという観客の経験と乖離していることが指摘された。

これらの論点に加え、多くの参加者を交えて、映画館プログラムの上映時間の記載にかかわる入退場のプラクティスの問題や、映画館プログラムというメディアの形態がいかに成立したのかという問題、戦時下における観客性は必ずしも統制に従属せず多様な実践が存在したという問題、プロキノのような映画館を中心としない上映コミュニティの人格性の問題、興行から意図的に方向づけられる観客性の問題といった、きわめて多様な議論が活発に交わされ、盛会のうちに研究会を終えた。

(うえたまなぶ、映画文献資料研究会、神戸学院大学)

映像心理学研究会とアニメーション研究会合同研究会報告

横田 正夫

映像心理学研究会とアニメーション研究会の合同研究会が、Zoomを用いたオンライン形式で、令和3年3月28日（日曜日）に開催された。同会は日本アニメーション学会の心理研究部会との共催で催された。

当日のプログラムと発表概要は以下の通りであった。

プログラム

15:00～ 開催挨拶

アニメーション研究会

15:10～16:10

研究発表「アニメ視聴による心理的体験の構造化および作品/視聴者要因に関する臨床心理学的研究 ―アニメーション療法の開発に向けて―」

発表者：藪田拓哉

要旨：アニメ視聴によって人々はさまざまな体験をするが、時に生きる糧になるなど、援助的な側面も包含している。しかしアニメーションを心理的援助に応用する試みは行われておらず（横田, 2019）、基礎的な知見が少ないのが現状である。本発表では、臨床心理学の観点からアニメの心理的支援への活用可能性に繋がる研究を紹介する。研究1では、アニメ視聴による心理的体験の構造化を行った。その結果、視聴者は娯楽的な体験・影響にはじまり成長や意味を見出すという、より臨床心理的な体験・影響に至るまでの体験をしている事が示唆された。続く研究2は、その体験の生起に関わる作品要因と視聴者要因、体験生起を妨げる阻害要因を検討した。その結果、作品と視聴者の間でどのような心の働きが反映されているのかについての示唆が得られた。本発表では、「アニメーション療法」の可能性も視野に入れつつ、アニメ視聴体験の効用について心理学的に研究する意義やアニメの持つ力について議論したい。

16:10～16:20 休憩

映像心理学研究会

16:20～18:00

パネル・ディスカッション「アニメーション ―「イメージ」の伝達―」

進行：野村康治

企画要旨：アニメーションは、作り手が思い描いたものを具現化し、それを受け手に伝える表現だといえる。一般に私たちは、思い描くものを「イメージ」とよぶため、その具現化つまりアニメーション作りにおいて「イメージ」が不可欠だと考えるのはごく自然なことである。しかし、そこで必要とされる「イメージ」とはいかなるものなのであろうか。あるいは、アニメーションにおいて「イメージ」は本当に不可欠なものといえるのであろうか。今回のパネル・ディスカッションでは、アニメーション作りにおける「イメージ」の重要性を指摘する中村氏と、「イメージ」という概念を用いずにアニメーション作りを語る佐分利氏という、ある意味で対極的な視点に立つ2名のパネリストを招き、意見交換をすることでアニメーションにおいて伝達される「イメージ」というものを検討していきたい。

パネリスト：中村 浩

題目：アニメにおける動きイメージのリアリティについて

要旨：アニメ作家が作り出す動きには、その動きのイメージと統合された作家自身の身体図式が表現されている。そしてその鑑賞者においても、観察した動きが鑑賞者自身の身体図式に関連付けられることによって、それがよりリアルな動きとして知覚される。しかしこれは身体図式と視覚的に鑑賞される動きの統合によって形成された視覚図式がアニメ製作者と鑑賞者に共通であることを前提としている。ではこの図式はどのようなプロセスを経て形成されるのであろうか。リアリティの高い視覚図式の形成が、視覚刺激の身

体図式への同化によって可能になることを発達心理学的観点から示したのがPiagetであるが、本報告では因果関係知覚の発達を題材とした研究結果を手掛かりとしてこのプロセスについて議論したい。

パネリスト：佐分利敏晴

題目：イメージで語らない生態心理学と、イメージとしてのアニメーション
要旨：生態心理学において私たちが視覚で環境を見るとき、脳内で作られるイメージや目にしたときの網膜に投影される像（イメージ）は必要無い。網膜は光学的配列を捉え、その配列そのものが視覚情報となるからだ。それは私たちの意識の外にあるもので、ヒトの状態や行為にかかわらず存在している。

しかし、アニメーションは映像であり、本来のイメージの意味から考えてもイメージである。だから、アニメーションの作り手が見せたいものに情報が片寄ることがある。普段の何気ない動作を改めて絵画的なアニメーションで作ると、高畑勲が指摘していたような「異化効果」によって、観客が持っている「動きの印象」ではないディテールが知覚される。このとき、アニメーションは作り手が「引き写した環境と動きの事実」であるとともに「思い描いた」ものとして機能し、非常に力強い表現となる。

以上のようなプログラムで実施された会であったが、それぞれの発表が充実しており、予定の時間を少し超過して進行した。Zoomへの参加人数は25人であった。

アニメーション研究会の藪田会員の発表では2つの研究が報告され、アニメーションを心理的な支援に役立てようとして、基礎的な資料を得ることを目的として行われた研究の紹介であった。その中の研究1ではアニメーションの心理的体験を情動的体験、気分的体験、認知的体験、向作品的体験に分けて紹介した。これらの体験は心理学的に見ると心の内的過程としてのものとキャラクターなどに魅力を感じるといったような作品の構成要素に対してのものに大きく分けられるように思われる。前者の側面を支援につなげられれば、視聴者の心理的な健康を促進することにつながる可能性があらうし、後者の側面を明らかに出来れば視聴者がアニメーションに魅せられるメカニズムに近づき、両者の関係を知ることができれば、心理的支援の大きな糸口が見えてくると思える。

藪田会員への質問としては、アニメーション以外の媒体との差別化はできるのかといったものであり、その点については今後の検討課題であるとの返答であった。

映像心理学研究会では「イメージ」をテーマにしたパネル・ディスカッションであった。中村氏は、氏自身の行った発達心理学的な研究をもとに論を展開した。氏の行った研究は因果関係知覚として知られるもので、四角い図形が左から動いてきて、止まっている四角の図形に触れる。止まっていた図形が動き出すと両者の間に「衝突して突き飛ばされた」と言ったような印象が生起する。この因果関係知覚の四角図形の接触する場面を覆うようなトンネルを用意して、それでも因果関係知覚が成り立つのを調べた。それによると5歳ごろが境目となり、それ以前では衝突する場面が目には見えず、衝突事態が報告されないが、5歳ごろにはトンネル内での出来事でも衝突として報告されるという。こうした差異を、幼児の身体図式が視覚図式に同化されたためであるというのが中村氏の報告であった。つまり我々がアニメーションで動きのイメージをリアルに感じるのとは5歳児の幼児と同様に身体図式を知覚図式に同化するメカニズムを背景にしているということになる。

これに対し、動きの知覚に対して、事象を知覚する必要はないといった意味での報告をしたのが佐分利氏である。生態心理学者である氏は、環境の視覚的配列の不変項が再現されれば、それだけで動きの知覚が成り立つと

アナログメディア研究会

太田 曜

述べる。その例として示したのが高畑勲監督の「かぐや姫の物語」で姫が祝の席を抜け出して疾駆するシーンである。このシーンでは姫の姿が視認できない不定形となっているが、それでも疾駆している印象は視聴者には得られる。このシーンについてチャットを使った質問で、手足は認められる、ということでも必ずしも動きだけの抽象化はされていないのではないかとコメントがあった。しかし、姫の姿が全身で描かれる必要がないし、特にアニメーション研究会の藪田会員の指摘のように視聴者はキャラクターに魅力を感じることが多い中で、そのキャラクターを無化してしまっているのが高畑作品であるので、佐分利氏の指摘は有意義なものであろう。

中村氏は因果関係と言った事象の知覚、佐分利氏是不変項といった環境要因をあげ、必ずしも知覚の成立にイメージが必要ないことを示している。キャラクターといったイメージが重視されるアニメーションにおいてこうした指摘は、アニメーションの基本を知る上で、よく吟味されるべきものと思われる。

(よこたまさお／アニメーション研究会代表、映像心理学研究会代表、日本大学)

実証的研究

『遠隔でフィルム映像制作実習は可能か?』8ミリフィルムでの映像作品制作

ワークショップ形式での実証的研究

2020年12月から2021年2月14日まで全部で4回開催

■第1回：12月5日 土曜日 13時~14時30分

8ミリフィルムカメラでの撮影

■第2回：12月20日 日曜日 13時~14時30分

撮影した8ミリフィルムを自家現像

■第3回：12月27日日曜日 13時~14時30分

自家現像したフィルムを編集

■第4回：2021年2月14日日曜日13時~14時30分 → 1月10日日曜日

から変更 映写、テレシネ、講評

■第五回 番外編：2021年2月23日東京 8 ミリシネ倶楽部主催『8 ミリ機材フリマ』

協力アナログメディア研究会 ZOOMで講座参加者と東京 8 ミリシネ倶楽部等と実習参加者(定員5名)へ機材などを郵送し、ZOOMなどを使って遠隔でフィルム作品制作の実習を行った。また、実習は行わない人もその実習をZOOMで聴取。

実習の参加者は沖縄、名古屋、など今までアナログメディア研究会が主に東京で行ったワークショップなどに参加していない会員も参加した。実習のワークショップを機材などの郵送とZOOMで行うという試みは遠隔地からの参加が可能という事では大きな意義があった。

やり方は、実習参加者へ事前に機材やフィルム、現像の薬品などを宅配便で郵送。講習の当日より前に説明の資料をメールで送り、当日はZOOMを使って、機材の使い方などを説明するという事だった。8 ミリフィルムでの制作、また自家現像などは初めて行うという人がほとんどだったが、大きな失敗も無く、全員無事に、撮影、現像、上映を行う事が出来た。

各回の実習の様子は以下のような感じであった。

■第一回：8ミリフィルムカメラでの撮影

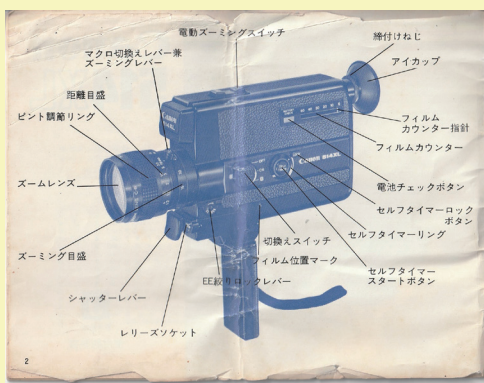
実習参加者に全て同じ機種で8ミリカメラと取説を送り、当日は実物を見せながら使い方を説明。その前に、8ミリフィルムを扱うのが初めての人がほとんどだったので、そもそもフィルムとは、撮影とは、現像とは、などという基本的な事項についても駆け足で説明。



郵送した機材などの一部



現像処理後に乾燥



使用したカメラの取説

■第二回：撮影した8ミリフィルムを自家現像

各自撮影済みのフィルムカセットからフィルムを暗室内で現像タンクへ移し替え、薬品で処理して現像した。暗室は家の中で夜真っ暗になる場所を探し、そこで行なった。トイレの窓を黒紙で塞いだり、押し入れに入ったりする事で、チェンジバッグを使わないで詰め替え作業が出来た。現像処理では薬液の温度管理と時間の管理が重要だが、全員絵が出ないなどの失敗もなく、自家現像を行う事が出来た。



撮影済みのスーパー8カセット、ENDマーク。



フィルムを現像タンクへ

■第三回：自家現像したフィルムを編集、映写、上映

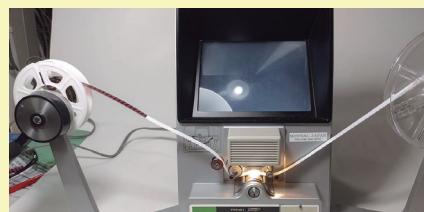
自家現像したフィルムをリールに巻いて、映写機にかけて映写する。その際、フィルム先端にリーダーフィルムを繋ぐことで、フィルムの切断、接合をスプライサーを使って行う。実際のフィルム編集作業は、物理的にフィルムを切ったり繋いだりして行うのだが、テレシネ(ビデオ化)して、編集はビデオで行うというのも今流のやり方の一つ。



フィルムを映写機にセット



メインのファンクションスイッチ



編集にはこのビューワーを使う

■第四回：映写、テレシネ、講評

最終回では、スキャンしたフィルムを見て、講評を行なった。

遠隔で8ミリフィルムの制作実習、しかも現像まで自分で行うという無謀な試みであったが、大きな失敗も無く、無事全員終了する事が出来た。この事は、今後の研究会の活動を考える上でも、大きな収穫であった。過去何回も都内で場所を借りて、対面で、フィルムでの制作や自家現像に関する講習会、ワークショップを行ってきた。特に2019年3月に開催した自家現像に関する講習会では、遠方よりの参加者から、ぜひ関西などでもやって欲しいとのご意見を頂いた。コロナ感染拡大という後ろ向きの原因によって、大学の授業などが遠隔で行われるようになり、実習についてもいろいろ模索された2020年度だった。しかし、フィルムでの制作実習が遠隔でも可能である事は、今回の研究会の結果からはある程度証明出来たのではないかとと思われる。



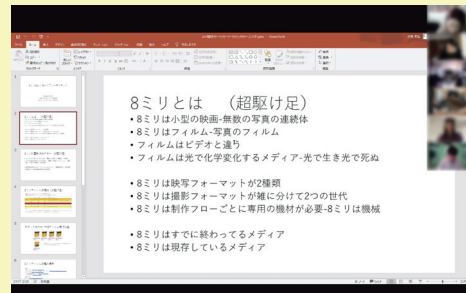
参加者の作品

今日、フィルムは映像の分野でメジャーな存在ではないが、表現のメディアの一つとしての存在意義は消滅した訳ではない。そのことが我々アナログメディア研究会のレゾナントルでもある。各大学等の映像関連学科の学生の中にも一定程度の学生が表現の一つとしてのフィルムに興味を持っていたりする。しかし、我々研究会に関係している教師の中でも、その少数の学生の為だけにフィルムの講座を開講するというような事は必ずしも現実的ではない。全国各地にある映像を教える大学などの学生のうちで、フィルム実習を学びたいという者には、どこかの担当者が、あるいは我々研究会の会員が、主催して遠隔で講座を行えば、どこに住んでいようと、同時に実習を学ぶ事が出来る。今回の研究会の講座はそのような可能性があることを示したと言える。

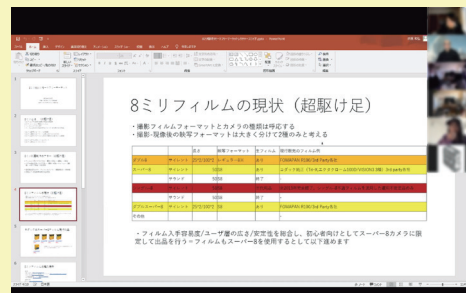
我々研究会としては、この遠隔でのフィルム（実習）講座を今後も継続、発展させていこうと考えている。たとえコロナ感染が収束して、対面で講座やワークショップが行えることになっても、各地に居るフィルム愛好家、フィルムに興味を持っている若者、興味はあるがアクセスの方法が分からない人などに対して、遠隔での講座、ワークショップが有効であると考えからた。

■第五回：番外編 東京8ミリシネ倶楽部主催『8ミリ器材フリマ』協力アナログメディア研究会 2021年2月23日 ZOOMで講座参加者と東京8ミリシネ倶楽部等と研究会講座参加者で東京8ミリシネ倶楽部の人からの提案で行われた、8ミリ器材についてのレクチャーと不要器材を譲るフリマ。我々アナログメディア研究会の協力企画である。目的は、8ミリで制作をしたいと思っても、新品で器材を購入する事はほぼ出来ないの、オークションなどで中古を買うことになる。その際、ちゃんと動くモノなのか、価格

が果たして適正なのかは初心者には特に分かりづらい。また東京8ミリシネ倶楽部の会員の中には多く所有している器材を使いたいと思っている若い人がいれば譲りたいという人が居る。オークションなどでは転売を目的に購入する人がいたりするので、本当に器材を使いたいと思っている人へなかなか譲ったりする事が出来ない。そうしたミスマッチを避けるために、講座参加者と研究会の教え子の一部に限定して遠隔で行われた。当日は、時間の大半が8ミリの器材や若干の歴史についてFILM CLUB BLOGを主催するマディ折原氏による解説、その後東京8ミリシネ倶楽部の阿部氏、八尾氏、マディ折原氏、などが不要となった可動器材の譲渡が行われた。研究会の講座に参加した人たちは、その後も制作を継続したいという希望を持っている人達だったので、非常に有効な催しであった。また、主催者側も、器材を売るという事ではなくて、有効に活用して欲しい、という事で、先々器材にトラブルがあれば相談に応じるという事で、貴重な器材が作品制作に役立てられる事と期待される。



8ミリとは
(超駆け足)



8ミリの現状
(超駆け足)



8ミリ映写機
(フリマでの
出品器材)

以上

文責：太田曜（おたよう／アナログメディア研究会代表、東京造形大学）

ショートフィルム研究会

林 緑子

ショートフィルム研究会 2020年度 活動報告

本年度の活動として、前年度の講演『アニメーション研究を牽引してきた功労者 渡辺泰 ～その研究活動と功績～』展を振り返って』の記録誌を作成した。本講演は、2018年の9～10月にかけて京都のおもちゃ映画ミュージアムで開催されたアニメーション研究者の渡辺泰氏を顕彰する展覧会の報告会である。内容は、展覧会で展示された渡辺泰氏所蔵のアニメーション関連資料をもとに企画内容を振り返りながら、戦後の国内アニメーション受容とともに研究者をファンの側面からも考えるものであった。

記録誌の作業内容は、本件を企画した森下豊美会員によって文章のまとめ作業や誌面のデザイン等が行われた。講演者の佐野明子会員には講演部分の文章化したものを提出いただいた。校正を林緑子会員含め3名で行い、最終稿を森下会員がまとめて印刷した。現在、希望者へ無料配布を行っている。佐野会員、森下会員、林会員のいずれかより配布可能である。

仕様：A4サイズ、24頁、2021年3月完成、150部

(はやしみどりこ/ショートフィルム研究会代表、シアターカフェ)

アジア映画研究会

石坂 健治

◎第3期第2回(通算第35回)例会

日時：2020年10月6日(火)18時～20時

会場：Zoomによるオンライン開催

座長：石坂健治(日本映画大学、本学会員)

内容：

発表「ポスト真実時代のフィリピン映画 ～『インディペンデント映画の逆襲』で試みた一考察～」 40分+討議

ゲスト/発表者：鈴木勉(国際交流基金マニラ日本文化センター所長、在フィリピン)

今回は初めて在外の発表者とZoomでつないでの例会となった。発表者の鈴木勉氏は永らくマニラに駐在して文化交流に携わっており、その経験を活かして2020年に『インディペンデント映画の逆襲 フィリピン映画と自画像の構築』(風響社)を刊行したタイミングであった。今回は同書の内容をふまえながら、国民国家システム、資本主義、民主主義、自由主義など戦後の社会を支えてきた基本的な規範への疑問が渦巻く時代において、フィリピンの映画人がそうした問題にいかに対応してきたか、そしてフィリピン社会を覆い尽くしてきた植民地主義とそれへの退行に対してどのように応戦してきたかを詳解する発表となった。とりわけ映画人の活動の拠点となった2005年創始の「シネマラヤ・フィリピン・インディペンデント映画祭」を中心とした文化運動について検証がなされた。

シネマ+ラヤ(希望)という造語を掲げたこの映画祭は、シノプシスのコンペに入選した10人ほどの若い作家に製作資金を提供し、1年後に映画が完成するまで面倒を見るというシステムで、お披露目となる毎年8月の映画祭でその成果を競うというユニークな運営スタイルを持つ。国の文化機関がインディペンデント映画を重点的に支援することの影響は大きく、フィリピン国内のみならず近隣の東南アジア諸国にもインディーズ製作支援型の映画祭が林立するに至っている現況が報告された。

同映画祭の母体であるシネマラヤ財団は2019年に日経アジア賞を受賞。その活動が日本で評価されたとして内外で大きく報道され、その折にシネマラヤの名を知ったという参加者もいた。質疑応答を含め、フィリピンの事例をふまえて自ずと日本の文化行政と比較する視座も醸成される場となった。(石坂健治)

◎第3期第3回(通算第36回)例会

日時：2020年12月1日(火)18時～20時

会場：Zoomによるオンライン開催

座長：松岡環(アジア映画研究者・字幕翻訳家)

内容：

①報告「“ハコ”が変えた映画のスタイル——経済発展とインド定型映画の変化——」

ゲスト/発表者：松岡環 20分+討議

②「2000年代インド映画のナラティヴ——『RAB NE BANA DI JODI(神が結び合わせた2人)』を例に——」

ゲスト/発表者：森長恵梨(インド・ミュージカル映画研究) 80分+討議

①の報告は、1990年代以降のインド映画の形態変化を促したものが、欧米型シネマコンプレックスであったことを検証したものである。インドは1991年の経済政策転換により、外国企業に門戸を開き、IT産業等を中心に急激な経済発展を遂げた。映画界も例外ではなく、1997年にオーストラリ

ア資本との提携で、初の欧米型シネコンがニューデリーに出現、以後各地に誕生したショッピングモールに併設される形で、シネコンが一挙に普及した。現在では大都市はもちろん、中小都市にもシネコンが林立し、従来型の一戸建て、キャパシティ千人程度、単数スクリーン、という映画館はほぼ駆逐されてしまった。従来型映画館では3時間の上映枠が定着していたのだが、シネコン上映で時間がフレキシブルになると、まず1本の上映時間が短くなり、そのためにソング&ダンスシーンが削られ、さらには娯楽要素満載だったものが1つか2つのジャンルに限った作品が増加する、という変化が生じた。こうして約70年間続いてきたインド映画の特徴——3時間近い長尺、歌あり踊りありの「ミュージカル」、あらゆる娯楽要素を盛り込む——が、シネコンという“ハコ”の導入によってあっけなく崩壊した。変化は現在も進行中で、20世紀前半のイギリス植民地時代に建てられた由緒ある映画館も姿を消しつつある。インドの映画館に関する諸情報も付け加えながら、インド映画界のこの四半世紀の変化を述べた。

②の発表者は、関西大学在学中に米・仏のミュージカル映画を学んだあと、パリ第3大学映画学科で交換留学生として学び、その後インド映画の魅力に目覚めた若手研究者である。本発表では2008年のヒンディー語作品『RAB NE BANA DI JODI (神が結び合わせた2人)』を素材として、挿入されたミュージカル・ナンバー4曲が使われた5場面、ならびにクライマックスのダンスシーンを、物語の流れと関連付けながら分析した。本作品を選んだのは、「伝統的スタイルを残しつつ、ストーリーやテーマが重視されるようになった2000年代の作品」を代表するもの、という位置づけからであり、歌と踊りが物語から逸脱した単なる娯楽要素ではなく、物語と緊密に結びついたインド映画独自のナラティブ手法であることを実証するのが本発表の目的であった。対象映像を駆使しての分析は非常に興味深く、映像の音声ボリュームが絞れなかったために発表者のボイスオーバーでの解説が聞けなかったことは残念だったが、いずれのシーン分析も何度も見ている者にとっても新たな発見があり、啓発される発表となった。インド映画、それも一般的な娯楽映画に分類される作品がこのように分析されたのは、日本では初めてではないかと思う。

この日は22名のオンライン参加者があったが、発表後の質疑応答では、アメリカ映画のミュージカルとの比較を中心に様々な議論がかわされた。その成果も含め、②の発表者には、貴重な発表が文字稿にまとめられることを期待したい。(松岡環)

◎第3期第4回(通算第37回)例会

日時: 2021年2月2日(火)18時~20時

会場: Zoomによるオンライン開催

座長: 韓燕麗(東京大学、本学会員)

内容:

①発表「2000年代の台湾映画産業と『海角七号』」

ゲスト/発表者: 阿部範之(同志社大学、在台湾) 30分+討議

②報告『華語独立映像観察/ Chinese Independent Cinema Observer』

創刊号: 現代日本と中国独立映画文化の関連性をめぐって

報告者: 馬然(名古屋大学、本学会員)・秋山珠子(神奈川大学) 30分+討議

今回もZoomによるオンライン開催のメリットを発揮し、発表者・参加者ともに首都圏以外の方や海外の方も交えた例会となった。

①台北滞在中の阿部範之先生(同志社大学)による第一報告の「2000年代の台湾映画産業と『海角七号』」では、台湾映画市場における中国語映

画最大のヒット作として知られる『海角七号——君想う、国境の南』(2008年)について、とくに監督の魏徳聖(ウェイ・ダーション、1969年~)の経歴と映画の製作過程などを追った上で、2000年代の台湾映画産業の変化の道筋を探った。

②第二報告は馬然先生(名古屋大学)と秋山珠子先生(神奈川大学)による共同発表であり、お二人が共同で編集した英語と中国語のバイリンガル・ジャーナル『華語独立映像観察/ Chinese Independent Cinema Observer』創刊号のテーマと内容についてご紹介いただいた。中国のインディペンデント映画文化の発生と発展は決して「孤島」ではないという観点を打ち出した本号は、とくに中国のインディペンデント映画と現代日本の映画文化との関連性に注目したものであった。執筆陣に日本の映画プロデューサーや映画祭の中心的人物も多くいるため、中国語圏映画の研究者のみならず、多くの映画研究者にとって非常に興味深い内容になっているのではないかと発刊を待ち望んでいる(2021年4月刊行)。

参加者から、①に対しては、台湾の映画祭が映画製作に与えた影響、コロナ以降の台湾映画市場の様子などについて質問があり、現地における最新情報を含め応答がなされた。②に対しては、中国のインディペンデント映画を数多く上映してきた日本の国際映画祭の問題、そして創刊号の日本語版を作らないか、などの提案とコメントがあり、活発な議論がなされた。

今回のオンライン研究会も、参加者から積極的な発言があった。Zoomの画面越しで議論をさらに深める時間がやや足りないように司会者として感じないわけではないが、短い時間のなかでも、知的な刺激を与えてくださった三人の発表者および真摯に問題について考え議論を交わっていただいたすべての参加者に、心より感謝を申し上げたい。(韓燕麗)

【2020年度の総括】

2020年度のアジア映画研究会は、4月に予定されていた海外ゲストを招いての公開イベントが新型コロナウイルス感染拡大の影響で中止されるという残念な幕開けとなった。その後の休会期間を経て、Zoomによるオンライン開催に切り替えることとし、8月の例会を「第3期第1回」として活動を再開。以後は下記のとおり、コンスタントに隔月(10月、12月、2月)に例会を開催し、年度内に4回のオンライン開催となった。

オンラインの不自由さはあるが、逆に首都圏以外の参加者が交じるようになり、フィリピンや台湾といった海外のスピーカーによる発表も行われるなど、これまでにない利点も感じられた。オンライン移行後の参加者は毎回20~40人台で推移しており、堅実な参加状況を維持している。また、本研究会での発表を起点にした論文が『映像学』に複数掲載されるなど、研究発表と論文執筆がつながる傾向がみられた点を付記しておきたい。

今後もしばらくは同様のスタイルが続くと思われるが、隔月(年間6回)の例会と1回程度の公開イベントの実施を目標に、着実に継続していきたい。(石坂健治)

(いしざかけんじ/アジア映画研究会代表、日本映画大学)

写真研究会

倉石 信乃

2020年度の写真研究会の研究発表会は、2回オンラインで開催された。発表報告は以下のとおりである。

第5回研究発表会(2020年10月25日)

テーマ：前川修『イメージを逆撫でする 写真論講義 理論編』/『イメージのヴァナキュラー 写真論講義 実例編』書評

発表1

「書評：『イメージを逆撫でする』の謎」

増田展大(九州大学)

発表2

「写真研究の論点：前川修『イメージのヴァナキュラー 写真論講義 実例編』書評」

きりとりめ(無所属)

共同討議

倉石信乃(司会、明治大学)、きりとりめ(土屋誠一(沖縄県立芸術大学)、中村史子(愛知県美術館)、前川修(近畿大学)、増田展大)

増田氏の発表は、前川氏による2冊の「写真論講義」のうち「理論編」を扱い、全章を一挙に解説するものであった。ただし増田氏は、前川氏のこの論集は重要な書き手(ベンヤミン、シャーフスキー、セクーラ、ブルデュー、バルティンク、クラウド、パッチェン、バルト)による代表的なテキストを章ごとに取り上げていることから、読者から写真論ガイドの役割を期待されるにも係らず、通説に抗して読解しているがゆえに特有の「難解さ」があったとした。

増田氏はその難解さ「謎」を解き明かすために、四象限のマトリクス上に彼らの写真論を扱った各章とデジタル写真を論じた二つの章をマッピングし、時おりこのマップを参照しつつ、手際よく章ごとに解説していく。増田氏は、縦軸に歴史実証的(上)⇄歴史叙史的(下)、横軸に形式主義(左)⇄文献主義(右)を取り、第1象限=モダニズム、第2象限=社会学、第3象限=美学・美術史、第4象限=ポストモダニズムと領域化した。たとえばシャーフスキーは第1象限の下方の領野に、パッチェンは第3と第4象限の境界に位置付けられる、という具合。特にこのマッピングでは、第1章のベンヤミンと終章のバルトが各象限の中央付近に配置されることで、論集の再帰的・円環的な構造も図示された。

増田氏は論集の企図が、「写真を語る枠組みそれ自体を更新するために、教科書的解説では硬直してしまう数々の二項対立の間隙を穿ち、重ね合わせつつ分岐させ、ズレや摩擦を抉り出す作業を、執拗なまでに繰り返すこと」にあると結論付けた。

きりとり氏の発表は、「写真論講義」のうち「実践編」を扱い、やはり増田氏と同様に各章を丹念にたどり解説した。その上で本書の「前提」の一つを「ヴァナキュラー写真論は文化研究なのか」という立論とその解答にあるとした。すなわち前川氏がヴァナキュラー写真を、モダニティとモダニズムに対する単線的な語りを相対化する基礎とみなし、その射程が特定の文化研究にのみ資するものではないと指摘した。さらにきりとり氏は本書の前提として、自然と文化を媒介する写真の物質性に身体性あるいは「身振り」を組み込み、写真研究の「縁」の再検討を促すことを挙げた。トルボットから「セルフ」に代表される今日のデジタル写真までを網羅する本書が、「共有可能性を抱えた写真の縁(ネットワーク政策、技術開発、UIデザイン等)」という有益な論点へと接続される可能性についても言及した。

質疑応答と共同討議では活発で貴重な議論が展開されたが、ここでは特

に各発表において提起された率直な問いとその応答のいくつかについてまとめておきたい。

まず「理論編」に対する増田氏の問いは三つに大別される。一つはクラウドを扱った6章については心霊写真論からクラウドを再読するというユニークなものだが、増田氏は、この読解で使用される「憑依」という語がどこか便利すぎるのではないかと、また歴史叙述として閉じた円環に向かう危険はないかと指摘した。第二にパッチェンを扱った複数の章について、パッチェンそれ自体への批判を訊いてみたいとした。第三にバルト的なインデクシ性を情動論的に読み換える試みは、かつて写真を無意識なる精神分析的な語彙で語られたのと相同的な意味で、大きな物語に回収されはしないかと問うた。

これに対し前川氏は、第一の「憑依」に関する問いについては、revenant(つねに同じ場所や対象へ帰する霊)ではなくghost(関係なく取り憑く霊)の「憑依」可能性を慎重に説いた。第二のパッチェンに関する問いについては、彼の議論がもっぱら美術史という制度に対抗するものとしてある点、またデジタル写真などについて語る射程を持たない「狭さ」に批判的であったとした。第三のバルトに関する問いについては、バルトのテキストがモダニズムとポストモダニズムの双方から排除されるため、両者の盲点を衝いてそれを救う方途としてそうした読解を試みたという。バルトをめぐる、身体や経験をないがしろにする、文学に写真を回収する研究上の流行から救い出す意図もあったとした。

また、きりとり氏から前川氏への問いは以下の3点に要約される。

- 1 写真の物質性の範疇自体を問うことが、今後の写真研究の核となっていくのか。
- 2 セルフィー論において、ナルシズムの肯定や否定とは異なる視点で、つまりどこまでも表層的な自己像をいかに表層的なままに記述することが可能だろうか。
- 3 写真の数限りない複数性(photographies)が、写真研究を相対化し続ける先に今後何が見えてくるのか。

これに対して前川氏は以下のように応じた。第一の問いについては、向後インターフェイスと触覚性についての論じ尽くされていない部分を、より厳密に考察したい。第二の問いについては、たとえばZoomについて考えてみると、本来の使用目的からのずれ、「自分が自分を見ること」の時間的なずれ、複数の顔がグリッド状に並立するなどが生じる。こうしたZoom経験の過剰により、単純なナルシズムの議論では収まらないものが書かれるのではないかと。第三の問いについては、すでにある様々な分野の写真に関わる研究を、横断的に議論するための枠組みが必要と考える。そのために「ヴァナキュラー写真論」を提出した。以上のような明快な解答を得た。

この他、土屋氏は、現在、デジタル写真の加工や位置情報などデリダのいうパレルゴ的なものが、写真の内側に折り畳まれていると指摘した。これを受けて前川氏は、パレルゴとは、内部的に確立していると思われているものがその実、パレルゴに支えられているという脱構築のための概念であるが、写真の縁が内部に取り込まれる事態は、脱構築を不可能にしてしまうだろうと述べた。

また中村氏が、あるセルフを「失敗」と見なすことは、前世紀的な主体の意識あるいは無意識の表れではないかと問題提起し、そこからセルフあるいは今日の写真をめぐる、いわば「失敗の不可能性」をめぐる議論が活発になされたことも銘記しておきたい。

増田氏ときりとり氏の「精読」による今回の発表会は、写真研究会では初めての書評会であり、かつ統一のテーマを掲げて行われたものであったが、「脱構築が不可能になった」写真の現況を複雑に照らし出す好機となった。

第6回研究発表会(2021年3月27日)

発表1

「荒木経惟の「複写」について——1970年代の作品を中心に」

篠田優(写真家・明治大学理工学研究所 建築・都市学専攻総合芸術系 博士前期課程)

発表2

「クィア実践としての「家族写真」

寺田健人(写真家・東京藝術大学美術学部先端芸術表現科 教育研究助手)

発表3

「アノニマスな記録」としての写真——1960年代後半日本における写真概念の成立について」

久後香純(ニューヨーク州立ビンガムトン大学美術史コース博士課程/早稲田大学招聘研究員)

篠田氏の発表は、荒木経惟というプロブレマティックな写真家の60年代から70年代にかけての複数の作例の中で、固有の「複写」という概念形成に焦点を当てたものである。通常「私小説」のアナロジーで論じられることの多い荒木作品が、その形成期においてはむしろ、表現における私性や「主体」を捨棄しようとする身振りに注力していたこと、またそれが「写真そのもの」を前景化することへと接続されたことを、主に写真雑誌を中心とする同時代資料から読み解こうとした。篠田氏によれば、荒木において導入された「複写」は写真のモダニズム、とりわけ先行するリアリズム写真における近代的な主体に対する対抗言説的な意味を担ったという。このことから撮影手法においては、背景を均一にするなど規律化が行われる点で、ベッヒャー夫妻によるタイポロジーとの類縁性を持つものと捉えた。

発表後の質疑の中では「複写」というテーマを同時代の美術表現との関係のなかでもっと捉え直す必要や、また70年代以降の荒木自身の展開との関連付けについても課題として挙げられた。また荒木における「複写」が制作主体の放棄をそのまま意味するものではなく戦略であり、近年表面化したセクシズム的なものとも関連するのではないかという意味の指摘があった。

寺田氏の発表は、写真実践における「家族写真」を、現代における制度的な変容の中で捉え直そうと企図するものであった。まず長島有里枝による家族の記念写真を模した、他人の並立する肖像の連作や、ナン・ゴールドディンの「性的依存のパラド」を例示し、写真家の表現の中で「家族写真」がメタ・レベルでの形式への審問において(長島)、またリアルなドキュメンタリーにおいて(ゴールドディン)、規範を覆しうる肯定性を持つことを明らかにしようとした。

さらに寺田氏は、ジョン・ハーシュ、ブルデュー、クラウスによる、「家族写真」の制度性をめぐる批判的テキストを参照することで、通念としての「家族写真」の虚妄をあぶりだし、クィアな実践として「家族写真」を再定義しようとする。その際に再度、ゴールドディンの重要性が、オルタナティブな「家族写真」として取り上げられた。

質疑においては、アノニマスな家族写真ではなくそのフォーマットを利用

した写真作品をあくまでも扱いたいように思えるとの指摘があった。これに対し寺田氏はその両方を射程に収める研究を進めたい意向を示した。またゴールドディンの作品を家族の枠組みで捉えるべきかを含め、彼女の作品をめぐる「拡大家族」をどのように捉えるかは今後の課題となった。寺田氏はこれに加え現実社会における家族制度の変容と写真との関係を、台湾や韓国のような具体的な場所でのリサーチと絡めて考察したいと述べた。

ニューヨーク州からオンライン参加した久後氏の発表は、1971年平凡社刊の大著『日本写真史 1840-1945』とその元になった1968年開催の日本写真家協会主催「写真100年 日本人による写真表現の歴史展」を通して、1960年代後半に登場した写真の言説を改めて検証するものであった。その主な担い手として、同展の編集委員であった多木浩二、内藤正敏、中平卓馬らの言説が取り上げられた。

久後氏は、「写真100年展」当時において、日本写真家協会の幹部たち、会長の渡辺義雄、名誉会長木村伊兵衛ら「戦中派」と、編集委員(東松照明、多木浩二、内藤正敏、中平卓馬ら)の「戦後派」の間に一種の対立を見ている。写真家という職能の地位向上を目指す戦中派と、それを毀損することを厭わない戦後派では利害が相反することを説得的に論じた。このことと関連して、戦後派の写真家が既存メディアではなく、左翼系あるいはリベラル系雑誌などの言論空間に可能性を見たと指摘した。さらに、彼らは「記録」としての写真の評価しており、そこには機械主義的な美学があったが、他方そうして「記録」と言いつつも、たとえば田本研造を英雄視した内藤正敏をはじめとして、写真家の「精神」を称揚するという矛盾があったと結論付けた。

質疑応答では、1960年代当時の写真家・批評家たちの「記録」と「精神」の矛盾の指摘は重要であるが、田本に関する統一した研究がないという事実が、田本に関する精神性と記録性の分裂を生み出していると言えるのではという意見もあった。

また質疑では、写真100年展が複写による展示であったことに、編集委員の主張がどのように影響しているか、と問われた。これに対し久後氏からはライトボックスの展示などを含め複写展示には、編集委員の意図があったとする見解が示された。

この発表会では統一テーマを設けてはいなかったが、図らずもとりわけ篠田氏と久後氏の発表において、日本のモダニズム後期における写真家主体の再考が俎上にのぼった。すなわち1960年代後半という時期において主体批判とリンクする、記録や無名性、あるいは複写、マシニズムの強調というテーマが共通するものとして浮かび上がった。しかしそれは絶えず主体へと回収されるため、つねに矛盾をはらむものである。今後はこの矛盾をめぐる帰趨について、より実証的に、かつ批判的に読解していくことが求められるのだろう。

なお、次回の研究会はまだ未定ですが、9月頃に開催を予定しています。映像学会のMLで告知をいたします。発表の申込み等については、写真研究会HP(<https://sites.google.com/site/jasiasshaken/>)でご覧下さい。次回も多数の参加をお待ちしています。

(くらしいしの／写真研究会代表、明治大学)

映画ビジネス研究会

田村 順也

第一回映画ビジネス研究会報告

「社会的な危機の中の映画館の現状～コロナ禍と東日本大震災時を比較して～」と題して、12月21日にオンラインで発表を行った。

映画ビジネス研究会は2020年に発足、この研究会が第一回目となり、研究会代表の私、田村が発表した。日本映像学会では、映画ビジネス関連の発表が少なく、研究会もなく、より多角的な映画文化の研究の必要性を感じていたため、発足した。今後も、映画産業の現状を発表していくことで、映画の作品・歴史・そして産業を含めた映画文化の研究を深めていければと考えている。

昨今の新型コロナウイルス感染症の感染拡大により、2020年は映画界も大きなダメージに見舞われた。2011年の東日本大震災の際も非常に大きな災害によって映画館に大きな影響があり、東日本大震災の時の映画館の状況を振り返り、現在のコロナ禍と比較・変化を考えることで、映画館がこのような危機を乗り越えるための施策についても考察することが今回の発表の目的である。

2011年と2020年の比較の方法としては、震災直後の週末と前年の対比、コロナ禍での約1年間の興行収入推移を前年と比較して、その影響の大きさを示した。また、毎年公開されているファミリーピクチャー（ここでは『ドラえもん』『クレヨンしんちゃん』『名探偵コナン』）も前年と比較することで、映画館の客層への影響を考察した。東日本大震災の時はゴールデンウィークにかけて回復していったが、コロナ禍では、緊急事態宣言による映画館の一斉の休館状態と、その後の座席の販売制限によって、長い期間大きな影響を受けた。またファミリーピクチャーを昨年対比したところ、最終的な一年間の差と近いものがあることも分かった。

他にもコロナ禍で映画館に関する大きい出来事として挙げられるのが、ミニシアター系の映画館を救うため、映画監督の深田晃司監督を中心にしたクラウドファンディング「ミニシアターエイド」が始まり、クラウドファンディング史上最高額を記録したことである。日本はアメリカと比べ、多くの作品を上映しているが、それを支えているのがミニシアターの存在であり、日本の映画文化、映画館文化を守るため、映画監督を中心とした制作側から運動がおこったことは非常に重要なことである。コロナ禍の中でも、映画館で自分の作品を上映したい、という気持ちから映画館への支援が広がったことが、大きな特徴であり、映画館側としても、大きなスクリーンで上映したいという映画製作者の存在は、希望である。

2011年と2020年の大きな違いは映像配信の普及である。映像配信の利用者が増えることによって、映画館の観客が減ると思われがちだが、実際は観客も増え、映像業界全体の観客数は上向きになっている。

発表の最後に社会的な危機の状況を乗り越えるために重要なことを製作・配給・興行で考察した。

製作は社会的危機などの状況に限らず、観客が何を求めているのかに敏感になる必要がある。社会的な危機の状況ではアニメ・ファンタジー・コメディといった現実逃避型の映画がヒットする傾向が強く、想像力が豊かな作品が受け入れられるのはいつの時代も変わらない。

配給も今年はオンライン試写会・オンライン舞台挨拶など、デジタルとリアルを混合させたプロモーションが話題を集め、このようなプロモーションは、今後も場所を選ばず、アプローチできる人の数は増えていくことで、重要

なものになっていくだろう。

興行は安心安全な環境の提供が重要になり、映像配信会社との提携も今後強まっていくことが予想される。『劇場版「鬼滅の刃」無限列車編』が日本歴代1位の大ヒットとなり、世界のエンタテインメント業界でも大きく報道された。『鬼滅の刃』はテレビアニメが配信により多くのファンを獲得したことから、その他の作品が延期になる中、全国のシネコンで1日に5,000回上映する「全集中上映」と呼ばれる現象が発生したことにより、社会現象へと成長する作品になった。

『劇場版「鬼滅の刃」無限列車編』は社会的な危機の中であっても映画館と映像配信は協力し合うことで通常時とひけをとらない興行ができることを証明した。また多くの映画人が、映画館での上映を望み、そのために行動したことは、日本の映画文化の厚みを証明したと言える。

(たむらじゅんや／映画ビジネス研究会代表、株式会社ティ・ジョイ)

ドキュメンタリードラマ研究会

杉田このみ

第6回ドキュメンタリードラマ研究会を下記の通り開催した。

テーマ：ラジオとドキュメンタリードラマ

日時：2021年2月28日(日)13時～18時

開催方法：Zoomによるオンライン開催

参加者：約40名

主催：福山大学人間文化学部メディア・映像学科映画会

専修大学人文科学研究所

ドキュメンタリードラマ研究会

プログラム(二部構成)

第一部 福山大学人間文化学部メディア・映像学科映画会 企画
「ラジオ黄金期/テレビ草創期におけるドキュメンタリー制作」辻一郎さん
(元毎日放送取締役編成主幹)と、丸山友美会員との対談形式で行った。

第二部 専修大学人文研共同研究「ドキュメンタリードラマ研究」 企画
ラジオ番組『SCRATCH 差別と平成』(2019年放送、60分)を鑑賞し、制作者
である神戸金史さん(RKB 毎日放送 報道局 デジタル報道担当局長)の講
演。その後、今野勉さん(テレビマンユニオン取締役最高顧問)と、辻さんを
交え、パネルディスカッション、参加者との質疑応答を行なった。

研究会報告

第一部

1933年奈良県生まれの辻さんは、京都大学を卒業後、日本初の民間放
送として誕生した新日本放送、現在の毎日放送に1955年に入社した。テレ
ビ番組『若い広場』や『70年への対話』で民間放送連盟賞、『対話1972』
や『20世紀の映像』でギャラクシー賞を受賞するなど、数々の栄誉に輝い
ている。そのキャリアの出発点はテレビではなくラジオだった。対談では、
1961年6月14日放送『録音特集 あれから一年』の一部を鑑賞した。丸山
会員との対談形式で、辻さんの入社当時のことや、録音構成との出会い、初
めてラジオ番組を作ったときのこと、TBS吉永春子さんとの交流、テレビに移
動して考えたメディアの違い、現在の制作体制の違いなど、多岐にわたって
お話しいただいた。専修大学ネットワーク情報学部2年生から感想も話して
もらい、世代を超えた対談となった。

88歳になる辻さんは、オンライン画面越しでも、はっきり聞き取れる語り
口で、また60年代の記憶も鮮明で、お話には臨場感があつた。研究会メン
バーにとっても、参加者にとっても、貴重な話を伺う機会になっただけでは
なく、このように年を重ねてからも、自分の仕事について感動を持って語るこ
とができるようになりたい、と大いに励まされる機会となった。

第二部について

ラジオ番組『SCRATCH 差別と平成』(制作協力:TBSテレビ、制作・著作:
TBSラジオ、RKB毎日放送)は、2016年に発生した相模原障害者施設殺傷
事件の実行犯である植松聖死刑囚と、神戸さんとの対話の再現で構成され
ている。

植松は「障害者は生きていく意味がない」と犯行動機を語った。そうした
言葉は、現代の日本社会に根強く残る優生思想の存在を私たちに突きつけ
ただけでなく、誰もが共に幸せに生きるためにこの社会をどう変えていくべ
きなのか考える必要を迫る。『SCRATCH 差別と平成』は、こうした問題と向
き合うため、事件を起こした植松と障害のある子を持つ神戸記者との対話に

よって構成したラジオ番組である。接見の様子を撮影したり録音したりする
ことができない制限のなか、神戸記者が問いかけ投げかけた言葉に、植松
がどう答えたのか。二人の面会に立ち会った記者が植松役となり、神戸記者
とのやりとりを精密に再現している。この作品は大きな話題となり、放送文
化基金賞 最優秀賞、早稲田ジャーナリズム大賞 奨励賞、ABU賞 審査
員特別賞、文化庁芸術祭賞 優秀賞、日本民間放送連盟賞 優秀賞、ギャ
ラクシー賞 奨励賞を受賞。

鑑賞後、神戸さんより「ラジオとテレビ 表現の差異 『SCRATCH 差別
と平成』の取材を通じて感じたこと」と題してご講演いただいた。

神戸さんは、1991年に毎日新聞に入社し、長崎に着任した。2005年から
RKB毎日放送に入社した。新聞、ラジオ、テレビと違うメディア媒体での記者
経験を持っている。

事件を知り、障害を持つ親の立場と報道する立場の気持ちが複雑に交錯
し、個人的にSNSに投稿した文章が発端となり、ニュースになり歌になり、ラ
ジオ番組となった経緯を語った。

植松と接見することになり、相談した知人や、同行した記者からの言葉な
どで思索を重ね、番組を作り上げた。

植松の吹き替えは、当初TBSアナウンサーにする予定だった。しかし接見
に同行した記者が「腹式呼吸をやめれば、僕の声、植松に似ていませんか」
と話したことから、植松の吹き替えは彼が行うことになった。帰りの車で植松
との会話のメモを整理した。ナレーション収録では、神戸さんは記者に何度も
「僕の目を見てしゃべってください、僕を植松だと思ってください」と言われ
た。

その後、同じテーマでテレビ番組『イントランスの時代』として放送され
た。ラジオ版とテレビ版の構成表を並べ、また、これまでの記者経験を踏まえ
て、ラジオとテレビの表現の違いは「尺の感覚」だと感じた。テレビは3分を
長く感じるが、ラジオは短く感じることもある。聴覚はより根源的なものに触
れることで想像力を掻き立てる。ラジオに向いている素材や編集の仕方がある
と考えるようになった。

その後、神戸さん、辻さん、今野さんとのパネルディスカッションとなった。
今野さんからは「事件に関心を寄せて資料を集めていた。事件を通して考
え続けていることが、神戸さんの言葉の中にもあり、とても感銘を受けた」と
話した。辻さんからは「ラジオからは植松が考えていることがよく伝わった。
それは再現ドラマを入れているからだと思う。ドキュメンタリーに再現ドラマ
を入れることは、非難されがちだが、有効に再現ドラマを入れていくことが表
現として大事だと思った。」と話した。

ラジオやテレビで伝えるための表現としての工夫、「撮れなかった時の再
現」についての考え方など、フロアからも質問があり、充実した研究会となっ
た。

(すぎたこのみ/ドキュメンタリードラマ研究会代表、専修大学)

関西支部

豊原 正智

・第89回研究会(2020年12月26日、午後2時より)

コロナ禍のためリモート(Zoom)により、神戸学院大学を当番校として、既にご案内の以下の2件の研究発表が行われました。

(1) 新中国映画における満映の影響～映画『寂静の山林』を中心に～
張少博(神戸学院大学)

(2) 母性幻想、同性愛、<クィア>な女優 - 戦後文芸映画『挽歌』、『女であること』をめぐって
徐玉(大阪大学)

張会員は、コロナの影響で来日ができず、中国からのリモートでの発表となりました。そのせいか少々通信状態が不安定なところがありましたが、映像資料を駆使し無事発表を行うことができました。徐会員も具体的な作品分析を通して上記のテーマについて詳細に発表していただきました。

関西支部では、12月の研究会後に総会を開いており、これもリモートにより2020年度事業報告、2021年度事業計画案、2020年度会計報告が諮られ、いずれも承認されました。

・第90回研究会(2021年3月27日、午後2時より)

この回の研究会もコロナが収まらず、リモート(Zoom)にて甲南女子大学を当番校として、ご案内の通り、以下の2件の研究発表が行われました。

(1) ヒトの眼・機械の「眼」に対して「情報源」として機能するフラットネス
水野勝仁(甲南女子大学)

(2) メアリー・エレン・ビュートの抽象映画作品におけるヨーゼフ・シリンガーの芸術理論の影響
大橋 勝(大阪芸術大学)

Zoomによるリモートも2回目、前回よりはスムーズに行われたように思います。

次回、第91回研究会は大阪芸術大学を当番校として大会後の6月に、コロナ対策を行い、できればリアルな研究会として開催したいと願っています。

(とよはらまさとも/関西支部代表幹事、大阪芸術大学)

中部支部

前田 真二郎

例年、中部支部では年に3回の研究会を開催していたが、2020年度は、新型コロナウイルス感染症拡大にともなう社会状況を考慮し、開催は2回に留め、オンラインにより実施した。

第1回研究会は、2020年12月12日に情報科学芸術大学院大学[IAMAS]が担当校となり、Zoomウェビナーをプラットフォームで開催した。事前登録した中部支部会員が参加する一方で、中部支部以外の会員や一般の方々に対して、YouTube Liveによる配信も行い、研究会終了後も配信アーカイブを中部支部HPにて視聴できるようにした。1件の招待講演、2件の研究発表については質疑応答もスムーズに行われ、充実した内容となった。

同日、研究会開始前に第1回幹事会を開き、研究会の年間計画、幹事メンバーの確認をした。また、研究会後には中部支部総会を開催し、昨年度の決算及び、幹事メンバーについて報告を行なった。

第2回研究会は、2021年3月10日に名古屋学芸大学が担当校となり、Zoomミーティングにて開催した。第1回と同様に、他の支部会員や一般の方々に対して、YouTube Liveによる配信を行った。1件の研究発表と、8大学が参加する学生作品プレゼンテーションを実施した。例年は、担当校の会場にて学生作品の上映と作者による発表が行われるが、本研究会では、事前に作品(動画)をまとめた特設サイトをオンラインで公開し、研究会開催の1週間ほど前から閲覧できるように準備した。研究会参加者がそれらを鑑賞していることを前提に、学生は自作についての発表をオンラインで行なった。会員や他校の学生からの質問に発表者が答える質疑応答は有意義な時間になった。

同日、研究会開始前に開催した第2回幹事会では来年度の研究会の担当校やスケジュールを確認した。

通常は研究会後に親睦会の時間を設け、参加者は自由に情報交換をするのだが、今年度の2回のオンライン研究会ではそのような時間を作ることはできなかった。そのような従来に比べて足りなくなった部分は当然あったのだが、オンライン開催による良い部分もあった。研究会の配信を視聴した他の支部の会員の方が、後日、メールでコメントを寄せてくれたことはそのひとつだろう。愛知県外に住む中部支部会員からは、コロナ禍が終息してもオンラインでの開催は継続して欲しいといった意見もあった。事前準備の労力や機材トラブルのリスクを回避することは困難だが、参加人数は昨年の研究会よりも多かったことも踏まえ、今後の研究会にあり方は幹事会で引き続き検討する。

<第1回研究会概要>

2020年度 | 日本映像学会 中部支部 | 第1回研究会

日時：2020年12月12日(土) 13時30分よりオンライン開催

担当校：情報科学芸術大学院大学[IAMAS]

◎研究会スケジュール

13:20 - 第1回研究会 受付開始

13:30 - (配信開始)開会あいさつ

13:35 - 14:30 研究発表

(2件、発表20分、質疑応答5分 予備時間5分)

<休憩> 10分

14:40 - 15:15 招待講演(1件、35分)

15:15 - 15:30 ディスカッション(15分)

15:30 - 閉会あいさつ

16:35 終了

◎招待講演

Camera Obscura から Magic Lanternプロジェクト

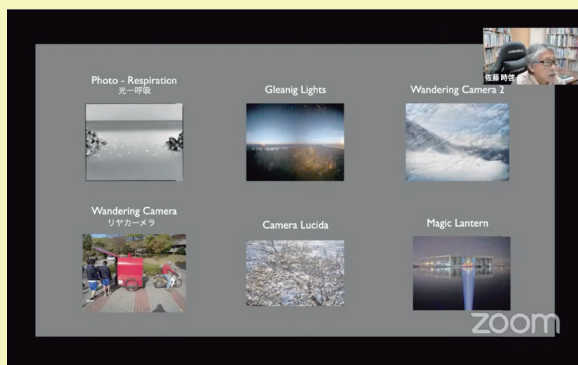
— 光に触れるところみ —

佐藤 時啓 氏 (写真家)

要旨：デジタル時代の今日、光が孔を通じて暗闇にイメージを成すこと、その光と闇との呼応関係に気づく機会はほぼ無いと言って良い。しかしその実、映像が生じる仕組みとしては針孔の原理が発見されカメラオプスクラが発明された時代から何も変わっていないのだ。どんなに高級なデジタルカメラを使って写真を写そうにも、8Kのプロジェクターでイメージを投影しようとも、今のところ光学原理の根本である、孔を通じたイメージのやり取りやレンズガラスの屈折による集光という仕組みから逃れることは出来ない。しかしながら現在はその部分を全く意識せずにインターフェースの操作でイメージが得られる時代になった。私はそんな時代を生きながら、光学原理の原点を用いて作品を制作し、そして人々ともに様々なワークショップの活動を行っている。また美術のコンテクストから始まった私の行為も、モダンからポストモダン、そしてさらなる時代への思考から人々との関係性を構築する活動がベースになってきた。

佐藤 時啓 (さとう ときひろ) 氏 プロフィール

1957年、山形県酒田市に生まれる。1981年、東京芸術大学美術学部彫刻科卒業。1983年、同大学院美術研究科彫刻専攻修了。1990年、第6回東川賞新人作家賞受賞。1993年、メルセデス・ベンツ・アート・スコープ賞受賞によりフランス滞在。1994年、文化庁在外研修員としてイギリス滞在。2015年、第65回芸術選奨文部科学大臣賞受賞。国内外で展覧を多数開催、グループ展にも多数参加。東京都写真美術館、埼玉県近代美術館、シカゴ美術館、ヒューストン美術館などに作品が収蔵されている。現在、東京芸術大学美術学部先端芸術表現科教授。



Zoomウェビナーでの招待講演 (佐藤 時啓氏)

◎研究発表 (2 件)

「手が潰される感覚」を味わうメディアアートの開発

須藤 信 会員 (愛知淑徳大学 人間情報学部 助教) ※発表者

山口 李々菜 (愛知淑徳大学 人間情報学部 4 年) ※共同研究者

要旨：近年のHMDを用いるVRコンテンツでは、身体所有感の研究が進められている。名古屋市立大学大学院の研究者らが発表したStretchar (m) (2017) では、ぶら下がり運動を用いて腕の伸縮感を誘発させることが可能であることが明らかにされた。このように、HMDを用いて体験者に疑似的な感覚を与えるVRコンテンツが開発されているが、手指の動きが連動するコンテンツの制作は進んでいない。手指がVR環境で連動することは、体験の没入感や身体所有感を高めることが期待できるため、本研究では現実環境とVR環境の手指の動きが連動し「手が潰される感覚」が得られるメディアアートを開発した。本作品は、鋼板が設置された机の前で、HMDを装着して体験する。椅子に座った体験者の視界に、作業台、椅子、ドア、蛍光灯、ハンマーが設置された空間が展開される。その空間では、巨大なハンマーが作業台に数秒おきに振り下ろされており、体験者は自身の手を鋼板へ伸ばすことで、振り下ろされるハンマーによって手が潰されることを疑似体験することができる。

地球観測衛星と電波反射器を利用した地上絵制作プロジェクトについて / 2019年度の制作記録と8K映像化の試み

鈴木 浩之 会員 (金沢美術工芸大学 美術工芸学部 准教授)

要旨：本発表では、継続中のアートプロジェクト「だいちの星座」(共同研究者：宇宙航空研究開発機構 研究開発員 大木真人氏 / JAXA地球観測研究センター第4回研究公募 [2013~17年度]、JSPS科研費 [2013~15年度、2016~18年度、2019~21年度] 採択) の活動のうち、2019年11月に埼玉県久喜市にて実施された地上絵制作プロジェクト(主催 | 文化庁、埼玉県教育委員会) について振り返る。2019年の埼玉県での活動は、小学校の校庭で児童らと臨んだ地上絵制作において電波反射器を自立・配置する手法を試みた。また、従来「写真」としてデジタルCプリント出力してきた「だいちの星座」作品を、「おさなごころを、きみに」展(2020年/東京都現代美術館)にてUHD 8K映像作品として上映した。コロナ禍でのプロジェクトの状況とあわせて、近年の活動を紹介する。

◎補足情報

12:45 - 13:15 日本映像学会中部支部 幹事会 (オンライン)

※幹事のみ

15:45 - 16:15 日本映像学会中部支部 支部総会 (オンライン)

※中部支部会員のみ

<第2回研究会概要>

2020年度 | 日本映像学会 中部支部 | 第2回研究会

日時：2021年3月10日(土) 13時30分よりオンライン開催

担当校：名古屋学芸大学

◎研究会スケジュール

13:20 - 受付開始(中部支部会員/作品プレゼンテーション参加学生)

13:30 - (配信開始)開会あいさつ

13:35 - 14:05 研究発表

(1件、発表20分、質疑応答5分 予備時間5分)

<休憩> 5分

14:40 - 15:20頃 学生作品プレゼンテーション I

<休憩> 10分

15:30 - 16:30頃 学生作品プレゼンテーション II

16:30 - 閉会あいさつ

16:35 終了

◎研究発表(1件)

「Fluctuate」「Fluctuate 2」について

森 真弓 会員(愛知県立芸術大学 美術学部 准教授)

要旨：この2作品は、日ごろ意識しているモノやコトの隙間にある、無意識を意識させることによって、新たな気づきを生み出す効果を狙ったVR映像である。重ねられた環境音とスリットやグリッドで区切られた風景は、見る人が何を意識するかによって揺れ動く。知っているようで知らない、わかりそうでわからない、非日常のような日常を表現している。

◎学生作品プレゼンテーション

作品制作者の学生による発表(3分)と質疑応答(5分)を実施

<発表者(発表校順)>

◎名古屋芸術大学

『井守端会議』浅田 一樹(芸術学部 芸術学科 デザイン領域 メディアデザインコース 4年)

『INTENTION』ディレクション：平山 亮太、作曲：武石 智仁(芸術学部 芸術学科 デザイン領域 メディアデザインコース 3年)

◎愛知県立芸術大学

『SYNCROLL』上田 朝也(美術学部 デザイン・工芸科 デザイン専攻 4年)

『Make a pattern』石川 陽菜(美術研究科 博士前期課程 美術専攻 デザイン領域 2年)

◎静岡文化芸術大学

『Deep in Blue』桜木 葉月(デザイン学部 ビジュアルサウンド領域 4年)

『LOTOPO』杉屋 泰誠(デザイン学部 ビジュアルサウンド領域 4年)

◎椋山女学園大学

『Afterglow 9:16で撮影』二村 真以(文化情報学部 メディア情報学科 4年)

『楽しく過ごそうおうち時間』西川 みゆ、伊里 成未、小野田 往子(文化情報学部 メディア情報学科 4年)

◎中京大学

『re:mind』赤尾 将吾(発表者)、他(工学部メディア工学科、他)

◎名古屋学芸大学

『戯れ子ばこ』西尾 秋乃(映像メディア学科 インスタレーション領域 4年)

『記し"shirushi"』成田 開(大学院 メディア造形研究科 2年)

◎名古屋文理大学

『Magic of Reverie』倉知 駿(情報メディア学部 情報メディア学科 3年)

◎愛知淑徳大学

『河出雄浩 映像作品集』河出 雄浩(創造表現学部 メディアプロデュース専攻 4年)

『池田美結 デザイン作品集』池田 美結(創造表現学部 メディアプロデュース専攻 4年)

◎補足情報

12:45 - 13:15 日本映像学会中部支部 幹事会(オンライン)

※幹事のみ

以上

(まえだしんじろう/中部支部代表、情報科学芸術大学院大学)

西部支部

黒岩 俊哉

西部支部では、2021年1月24日(日) 15:00-18:40に、Zoomによる研究例会および支部総会をオンラインにて開催いたしました。2020年度は新型コロナウイルスの影響により、これが第1回目の研究例会および支部総会となります。

まず、研究例会の発表は3件で、発表タイトルと発表者は次の通りでした。

発表1：「短編映画『Keep Moving』について—デジタル技術を駆使した映像表現」

発表者：二羽恵太 (九州産業大学芸術学部)

発表2：「デザイン教育における動画を活用したオンライン授業について」

発表者：岩田敦之 (九州産業大学芸術学部)

発表3：「福岡と映画とアジアの30年」

発表者：西谷郁 (西南学院大学非常勤講師・アジア映画研究)

まず二羽会員からは、2020年に制作した短編映画『Keep Moving』の発表が行われました。これは2020年4月に開催された『九州産業大学創立60周年記念イベント「さよならからの遭遇」』で公開された短編映画で、老朽化のため取り壊されることとなった体育館をモチーフに制作されたものです。発表者は、非現実的な世界観をデジタル技術を駆使することで表現してきましたが、本作でも同様のアプローチをとりながら、今回は現代的なテーマに取り組んだことが紹介されました。また、制作された映画を実際に提示しながら、各パートや全体の制作技術を解説し、撮影・編集・特殊効果における独自の手法等を解説しました。発表後には、デジタル技術を基盤とした映画表現の可能性について、会員間で意見が交換されました。

次に岩田会員からは、動画を活用したオンライン授業の実践について発表が行われました。新型コロナウイルスの影響によって、2020年4月からはじまったデザイン教育の遠隔授業の中で、どのような動画を制作し、どのようなWEBサイトやYouTube、Zoom等のプラットフォームを選択しながら授業を行ってきたかを、発表者自身の事例を挙げながら解説しました。撮影・記録・配信のための特殊ツールについても言及し、発表後には意見が交わされました。ここでは遠隔授業を行う立場とそれを試聴する受講生の立場から、オンライン授業を対面授業に近づけるための、映像およびコミュニケーションツール技術について活発な検討がなされました。

最後に西谷会員からは、地方行政が開催している映画祭について分析・解説がなされ、それらの考察および問題提起が行われました。特に30年にわたって福岡で開催されてきた「アジアフォーカス・福岡映画祭(現・福岡国際映画祭)」では、その方向性の遷移や、それらを取り巻く文化政策について、映画祭のプログラミングチームおよび映画プロデューサーの立場から、詳細な意見が述べられました。文化芸術の本質と経済性の相克やバランスは、つねに多くの課題をかかえているものの、現在のアジア映画がおかれている現状や、福岡の地域性や特殊性をふまえることで、今後の施策がアジア映画の未来につながることに言及しました。

研究例会(研究発表)の後、2020年度第1回支部総会を開催いたしました。ここでは2020年度の活動実績報告と予算報告が承認され、同時に2021年度の活動計画を決定しました。特にコロナ禍における支部活動については多くの時間が割かれ、各会員のこの1年間の経験から導かれた意見や示唆は、支部の今後の活動にとって非常に有益なものとなりました。

なお、オンラインによる研究会の開催は、今回はじめてのことでしたが、西部支部以外や海外からの参加希望もあり、たいへん喜ばしく感じるとともに、今後の研究活動の方法を再考する機会となりました。

(くろいわとしや／西部支部代表、九州産業大学芸術学部)

編集後記

総務委員会 西村 安弘

会報191号(PDF版)をお届けします。

アルベール・カミュの『ペスト』の新訳が岩波書店から刊行され、疫病を取り扱った書籍が再び脚光を浴びているようです。ポッカッチョの『デカメロン』もご多分に漏れず、ペストが猖獗を極めるフィレンツェを逃れ、郊外の邸宅に引き籠った良家の子女たちが物語の快楽に耽るというものです。屋敷には召使が控えていて、飲食には困らないという設定ですが、食料の配達時に濃厚接触が起こらないのか不安に駆られます。死神が誰にでも平等に訪れることは、E・A・ポーの『赤死病の仮面』でも描かれている通りだからです。

「不要不急の外出の自粛要請」と聞くと、「贅沢は敵だ」とか、「欲しがりません勝つまでは」といった戦前のスローガンを連想してしまうのは、編集子だけでしょうか。社会的分業の中で生活している現代人は、ロビンソン・クルーソーのような自給自足生活を営めず、生活必需品を生産し、運搬し、販売する多くの他者に依存しない訳にはいきません。自宅に引き籠り、仕出し料理を注文できるのは、限られた階層の者だけです。他人の料理を背負い、自転車のペダルを必死に漕がないと生活できない労働者がいる事実を、黙殺することはできません。

しかし、『デカメロン』に登場する男女が、単に現実逃避を願って隔離生活を選んだ訳ではないでしょう。レクイエムと呼ばれる音楽に、死者の魂を悼む効果が認められるのならば、艶笑譚にも傷ついた心を慰撫する力が秘められていることです。科学は万能ではなく、人知の及ばぬ自然の猛威を前にした人間には、宗教のみならず芸術も必要なのではないでしょうか。ともあれ、東京に3度目の緊急事態宣言が発出され、本学会の年次大会も昨年に引き続きオンライン開催となることが決定しました。対面での発表を準備されていた会員の皆様、対面での参加を待ち望んでおられた一般会員の皆様には、総務委員としてお詫びいたします。

日本映像学会は1974年9月、初代会長の南博先生の下で産声をあげ、3年後の2024年には創立50周年を迎えようとしています。学会設立の労に当たられた多くの諸先輩が鬼籍に入られ、学会の歩みをどのようにして後世に継承するかも課題となっています。理事会では、年次大会のシンポジウムの記録映像をアーカイヴ化することも議論されておりますが、具体的な方策については、まだ検討が進んでいません。今号の展望欄では、3月に日本大学を退任された田島良一会委員に、過去の学会運営の実務について語っていただきました。ここに掲載された第5回大会の記念写真は、東京工芸大学短期大学の旧スタジオで撮影されたものと思われます。これは懐旧の情に浸るためではなく、これまでの学会活動が理事経験者の無償の行為によって支えられていることを記すと共に、現在にも通じるその構造的な問題を少しでも共有していただきたいという細やかな意図を、ご賢察いただければ幸いです。

(にしむら やすひろ／総務委員会、東京工芸大学)